

お話をよく聞く子どもを育てる

阿弥陀さま・お釈迦さま・親鸞さまのお話を聞いて、
やさしいこころを育む。

浄土真宗は聞法が第一と言われるように、み教えを聞くということがもとても大切です。同じように、子どもたちも、4つのおやくそくの3つ目に「お話をよくききます」ということが挙げられています。その中に「きく」という言葉がありますが、それに当てはまる漢字に二種類あることをご存知ですか。それは「聞く」と「聴く」です。

「聞く」の意味は「言語、声、音などに対して、聴覚器官が反応を示し活動すること」です。自然に音や声などが耳に入ってくることで意識しなくても音が耳に入ることを表します。

「聴く」の意味は「注意して耳にとめる。傾聴する」ということです。心を集中させてしっかりと耳に入れること・心に響くようなものを耳にとめることを表します。

「聞く」と「聴く」の違いとして一言で言えば、「意識しているかどうか」という点です。無意識で耳に入っている状態は「聞く」、意識して耳にとめている状態は「聴く」となります。「聞くこと」は誰でもできますが、「聴くこと」はなかなか意識していません。

だから聴聞するということは、なかなか難しいことなのです。人は聞いても聴こえず、聞けども聴かずという状態になっていくものです。いくら耳を澄ませてと自分が思っている、その実践は難しいことなのです。

なぜ難しいのか、それは人には疑心があるからです。自分のことを信じられず、周囲の人のことを信じられないようになれば必ずから聴聞することはできません。どれだけ全てのことを信じているか、そしてそのことに対して素直であるかということが大切なのです。

つまりは、信じていることができない状態では聴聞もまた難しいのです。人は素直になつてくると、他人の話を澄んだ心で聴くことができるようになります。素直でなくなつてくると、聞かなくなるだけではなく聞こうとする姿勢もなくなり、自分だけの殻に閉じこもつて疑心暗鬼に陥つて常に矢印を自分以外へ向けてしまいます。

頑固というものも、自分の考えだけが正しいと思ひ込み、相手の話をちゃんと聴くことができず、相手に自分の意見ばかりを要求するようになっていくことをいいます。理由は、不信や不安から傲慢とか不遜に陥っている場合がほとんどでしょうが、そういうさまざま状況がまた聴聞の実践ができないことになっていくのです。

ところが、子どもは、いつも素直にお話を聞きます。絵本を読んでいる時、先生がお話をする時等々、子どもたちはまっすぐな瞳でこちらを見ながらお話を聞きます。お話は目で聞くものだとよく言われますが、子どもほど目でお話を聞いているということが如実に分かるものはありません。その瞳には何の曇りもなく、素直に純粹にお話を受け取っているのです。私たちも、子どもと同じように、疑心を抱かず、素直にまっすぐにお話を聴くことが肝要なのではないでしょうか。

まことの保育の願い